講談社現代新書
2

# 光源氏の一生

慶応義塾大学教授　池田弥三郎著

講談社

■1964年4月1日第1刷
発行■光源氏の一生■著者　池田弥三郎 ⓒ Yasaburô Ikeda 1964 ■発行者　野間省一　東京都文京区音羽町3の19 ■印刷者　柳川太郎　東京都板橋区志村町5 ■印刷所　凸版印刷株式会社■発行所　株式会社　講談社
《振替》東京3930　《電話》東京 942—1111〈大代表〉
¥240 （落丁本・乱丁本はおとりかえいたします）

# 光源氏の一生

慶応義塾大学教授
池田弥三郎著

講談社現代新書

# 除籍

**著者略歴**

一九一四年、東京築地に生まれ、銀座で育った東京っ子。最初慶応義塾大学経済学部予科に進んだが、井筒俊彦氏（現慶大教授）と加藤守雄氏（現放送評論家）と席を隣合わせたことが文学部転科の動機となり、国文科で故折口信夫博士に師事した。「日本文学の民俗学的研究」を師承の学とし、この研究を通じて日本および日本人の研究を生涯の課題としている。博士論文は「日本芸能伝承論」。現在、慶応義塾大学文学部教授・慶応義塾常任理事・ＮＨＫ解説委員・ＮＨＫ用語委員・国語審議会委員などを兼務。

デザイン　岡島伴郎
イラスト　中村義雄
マーク　ノーベル平和賞

# まえがき

光源氏という人は、この世にじっさいにいた人ではありません。「源氏物語」という小説の主人公です。

源氏物語は、紫式部という一女性の手によって、今から千年もまえに書かれた小説ですが、広く世界文学を見渡してみても、その時分に、これほど大きな、また整った構想をもった長編小説は、どこにもありません。わたしたちの祖先が、これほどの価値の高い文学作品を、わたしたちにのこしてくれたということは、まことに尊いことだと思います。

日本文学といっても、今わたしたちが読んでみて、ほんとうにすばらしいと思うものは、そうたくさんはありません。専門の研究家が研究するのなら別ですが、一読者として、気軽に日本文学を読みますと、今日においても、文学的な感動をわたしたちに与えるものは、五つか六つということになってしまいます。

時代順に見ていきますと、まず、万葉集があります。しかしこの歌集は、四千五百首も歌が



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

集まっていますが、今のわたしたちにとって、価値が高いと思われる歌は、全体の一割まではありません。それから源氏物語。さらに江戸時代になって、西鶴・芭蕉・近松の作品。およそこのくらいにしぼられてしまいます。

その源氏物語にしても、始めから終わりまで、すべてすぐれているかというと、そうはいえません。

いったい、源氏物語はひじょうに長い小説です。そして、長いために、全部をていねいに読み通す人は、そう多くはいませんでした。小説は、ただ「長い」というだけでは価値に関係はありません。小説の長さは、書こうとする内容によってきまってきます。どうしても書かなければならない内容に対して、どうしても必要な長さでなくてはなりません。そういう見方をしますと、わたしたちの手にのこされた源氏物語は、かなりむだな部分がある、といえそうです。

たとえば、源氏物語は光源氏が主人公だといいましたが、終わりの三分の一ぐらいは、光源氏がなくなってしまったあとの話です。また、始めのほうは、こんなこともした、こんなこともあったと、いろいろな話がつけ加わっているようなところもあって、それらの部分は、かならずしも源氏物語の価値を高めているとも思われません。

そこでわたしは、長くて複雑な源氏物語の内容を、大胆にカットしてみました。そして「光源氏の一生」という筋道に、源氏物語の内容を再編成してみました。それが本書です。

あるいは、源氏物語の内容から、もっともよく書けている部分を、自由に抜き出してきて並べ変えてみた、ともいえるでしょう。

こういう仕事は、それをする人によって、ずいぶん違った形にまとめられてくると思いますが、わたしとしては、まずこれだけの話は、ぜひ知っておいていただきたいと思った部分を、書きまとめました。

源氏物語には、さいわいに、谷崎潤一郎さんや、与謝野晶子さんの全訳が出ていて、どちらも手にはいりやすく、それらの本のおかげで、難解な原文によらなくても、かなりの満足がえられると思います。そこでこの本が縁となり、手引きとなって、それらの訳によってなりとも、源氏物語の全体を読んでくだされば、たいへん結構だと思いますが、わたしとしては、この本で、まず、源氏物語のエッセンスは、あなたにお伝えしえたと思っております。

一九六四年新春

池田弥三郎

《目　次》

まえがき……三
はじめに……一五
1
〈1〉
まぼろし……一七
さびしい一年……一八
年は改まったけれど
思い出すのはただ……
庭の紅梅は咲けども
春すぎ夏立ちて
思い出は空のかなたに
年もわがよも今日や尽きぬる
〈2〉
まぼろしの歌……二三
ゆくかりによせて
なき人よ、いまどこに
うつろいゆく晩年の絵巻物
父の帝もまた
同じ思いの父と子
おもしろいその構成
愛情と理想像の書
2
〈1〉
母のない子……三一
生みの母……三三
三歳の光源氏をのこして
帝の愛を一身に
おそろしいしっとのうず
運命の皇子誕生
〈2〉
第一のまま母……三七
時の大問題、皇太子選び
はぶりのいい右大臣の娘
桐壺の更衣をのろい殺す？
人呼んで「弘徽殿の悪后」
〈3〉
光源氏の誕生……四一
父の帝の深いお心
源氏の姓をたまわって臣下に
王氏と他氏

〈4〉
光り輝く王氏の君
**もうひとりのまま母**……四五
桐壺そっくりの四の宮
藤壺の女御を慕う光源氏
つのるまま母への恋心
早くも波乱のきざし
**異常な恋の経験**……四九

**3**

〈1〉
**夕顔の花**……五〇
老乳母を見舞う
五条通りの小さな邸
はかない生命の白い花
「夕顔の女」の歌

〈2〉
**雨の夜の物語**……五五
恋の指導者、頭の中将
貴公子たちのしなさだめ
中将の愛人姿をかくす
それこそ夕顔の女

〈3〉
**覆面の男**……五九
夜ごとに夕顔のもとへ
顔も身分もわからない花婿
まったく秘密の〝しのび妻〟
ふしぎな恋愛生活

〈4〉
**〝なにがしの院〟で**……六三
初めて見聞きする庶民の暮らし
夜明け方の略奪
怪事件をはらむ、あき邸
ぞっとするような美男

〈5〉
**建物の怪**……六六
あっというまに
生き霊ののろい？
それとは思わない光源氏
犯人は荒れ邸の怪

〈6〉
**あとしまつ**……七〇
もしか生き返るのでは？
悲しみの鴨川べりで

〈7〉
重病でひきこもる
宮中と死のけがれ
**秘　密**……七四
それは完全に守られた
侍女をていよく軟禁
遺族たちの都落ち
なみなみならぬその意志力

## 4

**紫の女性**……七九

〈1〉
**山の中の少女**……八〇
光源氏〝わらわ病み〟に
おしのびの北山行き
僧房にかいま見る
地上の〝かぐや姫〟

〈2〉
**血　筋**……八四
持仏堂のたたずまい
美しいお下げ髪
恋しい人のおもかげ

〈3〉
奇しきそのおいたち
**略　奪**……八八
話のゆきちがい
非常手段を選ぶ
みんなそれを喜ぶ
理想の女性づくり

〈4〉
**大きな秘密**……九一
道ならぬ恋の完成
あまりにも重大な事件
男子出生
一生その胸のうちに

〈5〉
**秘密を知った人**……九五
その子は知っていた
深夜のうちあけ話
きのうに変わる若い帝
千年まえの〝暗夜行路〟

〈6〉
**紫式部の名**……九九
藤の花にかよう姫君

作者も紫に染まる
あやなす紫のいろどり
ふたりの〝女源氏〟
**5** **〈1〉** **葵の座の争い**……一〇五
**第一の妻、葵の上**……一〇六
幸福を一身に集めて
十二歳の夫に添い臥し
迎えられて通う夫
この妻、あの妻
**〈2〉** **第二の妻、六条の御息所**……一一〇
葵の上の強敵
いつのころからか公然の秘密に
年上の女のひけめ
背後勢力の推移
**〈3〉** **車の争い**……一一四
頼みにならない光源氏
斎院交替の盛大な儀式
葵の上の物見車くりこむ
御息所の車を押しやる
**〈4〉** **生き霊**……一一八
のりうつる恨み心
祈禱の煙がしみつく
葵の上の口から御息所の声
うわさにたがわぬ生き霊
**〈5〉** **第三の妻、紫の上登場**……一一三
夕霧の誕生と葵の上の死
御息所のあきらめ
あえなく消え去ったふたりの妻
真の妻いよいよ登場
**6** **須磨の浦波**……一二七
**〈1〉** **危険な関係**……一二八
光源氏の身辺に秋風
思いがけない失敗
敵方の娘から好意



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〈2〉
しげしげと密会
相手が悪かった
**破　局**……一三
帰りそびれた朝
つまらない父親
光源氏排斥の陰謀
都落ちを決意
**帝の御妻**……一三六
波音近いわびずまい
都の風も吹き絶えて
歌に知る須磨の関
それは流刑であった
**大あらし**……一四〇
引退知事の野心
断罪の真因は
読み進むほどに
たちまち火ぜめ水ぜめ
**犯した罪**……一四四

〈3〉

〈4〉

〈5〉

〈6〉
光源氏への神罰
神は〝乱れ〟を許さなかった
つぐないと試練
なき父、帝のお告げ
**開　運**……一四八
手厚いもてなし
明石の上
帰京の勅命
明るい春のおとずれ
**全盛の絵巻物**……一五三

7

〈1〉
**豪華な舞台**……一五四
大邸宅の造営
はなやかな〝殿うつり〟
退位した天皇の扱い
美しい静と動の展開
**一少女の出現**……一五八
心をくだく侍女右近

〈2〉

〈3〉
初瀬観音の宿所で
御前さまとはだれか
まぎれもなき姫の一行
**数奇な運命**……一六三
乳母の夫の遺言
母夕顔をさがして京へ
観音のひきあわせか
光源氏の邸へ
**光源氏の計画**……一六六
思いもつかぬ生活へ
妹とも知らずに恋文
夕顔の女への手向け
一門の長としての胸中
**一少女の出現、ふたたび**……一六九
内大臣の親ごころ
近江の君
支離滅裂
身にしみて知る

〈4〉

〈5〉

〈6〉
**ふたりの対立**……一七三
深慮と浅薄
しぜんの〝いどみ心〟
予期せぬみぞ
風流にはらむ抗争
**子どもたちの恋**……一七七
夕霧と雲井の雁
清純な仲をさかれて
みぞはさらに深まる
若い娘のかなしみ
**つまずき**……一八三
養女の身のふり方
少年のころにかえって
貫公子たちの動揺
黒い手におどる影

〈7〉

〈8〉

8
**晩年の波紋**……一八七
〈1〉
**四十の賀の祝い**……一八八

頂上に立った光源氏
比類のない紅葉の宴
石は投ぜられた
年若い皇女
**女三の宮の降嫁**……一九二

〈2〉

朱雀院の帝の気がかり
ふびんな〝紫の女性〟
白羽の矢は光源氏に
気のすすまぬままに
**女性の顔**……一九六

〈3〉

あきらめない男
ねこさわぎ
焼きついた一瞬
見せてはならぬもの
**ねこの夢**……二〇〇

〈4〉

七年ののち
「あらぬ人なりけり」
かくなるうえは
みごもり
**三人の子**……二〇四

〈5〉

ありえないこと
予言はあたっていた
寝床に男からの手紙
なんという愚かな……
**恋の消息**……二〇八

〈6〉

まずこれでよし
めんめんと情事をつづる
こつを知らない恋文
今にしてかえりみれば
**ことの処置**……二一三

〈7〉

朱雀院の帝五十の賀
胸をえぐる世間話
たえがたい底意地
あえない末路
**いろごのみということ**……二一六

〈8〉

波紋は静かに消えた

〈9〉
最高の女性選び
平和侵略の手段
残酷とも見える一面
**笛のゆくえ**……二二一
さびしい日々
その名器をもつべき人は
薫を見入る夕霧
語れど答えぬ光源氏

9
**光源氏の死**……二二七

〈1〉
**もののけのこと**……二三八
おそろしい怨霊
光源氏の力もおよばず
そのしつこさ
平安時代の社会心理現象

〈2〉
**紫の上の死**……二三三
危篤を伝えられて五年
萩の露のこぼれるように
見あきぬ美しさ

〈3〉
消えてかえらぬ煙に
**雲がくれ**……二三六
ぷつりと糸が切れたように
八年間の空白
神の死は語らない
光源氏の死もまた

〈4〉
**自分でつかんだ幸福**……二三九
「心長き恋」の完成
冷厳な一個の男性
恋がたきの生命も奪う
日本文学史上の巨人

光源氏略年譜……二四四

索引
四九、七九ページの写真提供「淡交社」

幸福はできあいではだめだ。あつらえでなければね。

アンドレ＝ジッド「背徳者」から

# はじめに

光源氏という名を、今まで聞いたことのある人は、同時に、光源氏という人は、ちょうが花から花へとび歩くように、女性から女性へと、浮気なつき合いをかさねていった人だ、というように、考えているのではないかと思います。光源氏の行動には、たしかにそういう一面があります。はなやかな、女性との交際のにぎわしさが、その一生をいろどっていることはたしかです。

しかし、光源氏は、ただそれだけの人物ではありませんでした。幾度か失敗もしました。それも、同じようなあやまちを犯したりしました。けれども、そういう失敗をくりかえし、あやまちをかさねているうちに、しだいに、人間としてみがかれていきました。一家一門をそのつばさの中にしっかりといだいた、大きな人物となりました。地位や身分がそうなったばかりでなく、人間そのものが、ゆたかで、大がらな人物になりました。

しかも、かならずしも、単純な「善人」ではありません。そのしぶとい強い心は、ときに、



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com